

先週私たちは、主が、異邦人のコルネリオに働きかけられることで、ヨッパに滞在していたペテロを招くようにされたこと、さらには、ペテロにも働きかけられることで、「異邦人とは交わりを持たない」というユダヤ人たちの常識を超えて、コルネリオの招きにペテロが応えるようにされたことを見ました。御霊を通して、「ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい」と主に語られたペテロは、翌日、ヨッパの兄弟たちと共に、カイザリヤへと出かけています。そして、今日のところですが、コルネリオに迎えられます。

24-26 節「その翌日、彼らはカイザリヤに着いた。コルネリオは、親族や親しい友人たちを呼び集め、彼らを待っていた。25 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝んだ。26 するとペテロは彼を起こして、『お立ちなさい。私もひとりの人間です』と言った」。

ペテロを出迎えたコルネリオは、その立場からすると、決してユダヤ人の前にひれ伏すような人ではありませんでした。でも、神様に対する彼の信仰が、御使いによって招くようにと言われたペテロの前に、彼をこのようにへりくだらせたのだと思うのです。もちろん、ペテロはそれを拒むわけですが、彼を立ち上げらせ、ことばを交わしながら、家の中へと入っていきます。そして、多くの人が集まっているのを見てこう言うのです。

28-29 節「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。29 それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです。そこで、お尋ねしますが、あなたがたは、いったいどういうわけで私をお招きになったのですか」。

このペテロのことばを聞いたコルネリオは、彼が祈りの中で御使いを見た様子や、その御使いによってペテロを招くように命じられたことを説明します。そのことは 30-32 節に記されていますが、すでに先週見た内容ですので、その次の節を見たいと思います。コルネリオが、その説明の後にペテロに語ったことばです。33 節「それで、私はすぐあなたのところへ人を送ったのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております」。

ここであることに心を留めたいと思います。それは、コルネリオとそこに集まった人々にとって、御使いによって招くように命じられたペテロから話を伺うということが、実に神様の御前に出るということ、つまり、神のことばを伺うのと同じ意味をもっていたということです。ですから、彼らは、主から直接語られるかのように、ペテロのことばに耳を傾けます。そして、ペテロが口を開くわけですが、彼はまず自分に与えられた確信について話し始めるのです。34-35 節「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです」。

先週の箇所で、ペテロの幻について見ましたが、それが食べ物ではなく、この異邦人たちのことであったことをペテロは悟ります。つまり、神様は、かたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるという確信でした。このことは、異邦人である私たちにとっては極めて当然と思えることでしょう。でも、自分たちこそ神に選ばれた民、アブラハムの子孫であると誇っていたユダヤ人たちにとっては、そうではありませんでした。彼らにとって異邦人は、まことの神を知らない汚れた、きよくない者であったのです。ところが、ついにその主の御心をペテロは悟ります。

では、ここでペテロが彼らに語ったメッセージの内容は、どういったものだったのでしょうか？すでにこれまで何度か見て来た内容と基本的に同じです。なので、詳しい説明はせず、みことばから直接見たいと思います。36-43 節「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。37 あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事がらを、よくご存じです。38 それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。

人々はこの方を木にかけて殺しました。40 しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。41 しかし、それはすべての人々にではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに食事をしました。42 イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。43 イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる、とあかししています」。

ここでも、ペテロは、主イエスを平和の君として語り、主が神様によって遣わされたこと、また聖霊と力を受けることで、主が良いわざといやしを行われたことを語っています。けれども、その主を、ユダヤの指導者たちは木にかけて殺したこと、しかし、神様は、三日目に主をよみがえらせ、自分たち、つまり、神様によって前もって選ばれた証人である弟子たちに現れさせて下さったというのです。

ここでペテロは、「主イエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方である」と言っていますが、そのすぐ後で、「この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる」とも語っています。つまり、主イエスは、今や天においても、地においても、いっさいの権威をもっておられる方です。主が再びこの世に戻って来られる時、主は、生きている者と死んだ者をさばかれます。では、どうですか？このさばき主である主イエスによって、罪に定められない人とはどんな人でしょうか？「この方を信じる者」、つまり、彼を神の救い主と信じる人は、彼の名によって罪の赦しを受けられるのです。

このペテロのことばを聞いた人たちが、そこで主イエスを信じたという表現は出てきません。でも、すでに見たように、ペテロから話を伺うことをして、「自分たちは神の御前に出ています」という彼らでしたから、彼らはペテロの語ったことばをそのまま神様のものと受け入れたのではないかと思うのです。何よりも、彼らが主を信じたことを次の44節があかししています。「ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった」。

どうやらペテロは、まだ話の途中のようでした。けれども、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊が下ったのです。それを目撃した人たち、つまり、ペテロといっしょに来ていた6人のユダヤ人たちは衝撃を受けます。それもそのはず、異邦人たちを迎え、その招きに応じるだけでも、彼らにとってはありえないことでした。それが、異邦人たちと交わりをもつだけでなく、彼らにも自分たちの受けた聖霊の賜物が与えられたのですが、彼らの驚きはそれは大きかったと思います。

では、彼らはどのようにして聖霊が異邦人たちにも下ったことを知ったのでしょうか？46節「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである」。ペンテコステの日に、聖霊を受けたペテロたちは、他国のことばで神様の大きなみわざを語ったわけですが、ここで聖霊を受けたコルネリオたちも、異言を話し、神様を賛美しました。異言とは、他国のことばを指す場合と、この世のものとは違った霊のことばを指す場合とがありますが、神様を賛美するのがわかったということは、それがペテロたちにもわかることばであったのかも知れません。また日本語で「賛美」というと、歌を歌うことだと思われるかも知れません。でもそれは、神様を大きくすること、つまり、神様をあがめる、ほめたたえるという意味です。

ペテロのことばに耳を傾けていたコルネリオたちは、このようにして聖霊の賜物を受け、神様を大きくする者、賛美する者とされました。そして、それこそが異邦人である彼らをして、ペテロたちと同じ救いに預かったという神様からのしるしであったのです。ペテロは言います。47-48節「『この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましようか。』48 そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日間滞在するように願った」。

もしかしたら、このところから、「聖霊はいつ与えられるのか？」と疑問に思う方がおられるかも知れません。というのも、ペテロが最初に語ったメッセージでは、「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受け

るでしょう」というものでした。そして、サマリヤ人たちの時がそうでした。彼らは、水のバプテスマを受けていましたが、彼らに聖霊が与えられたのは、ペテロとヨハネが来て、祈りをもってその手を彼らの上に置いた時でした。ところが、今日の異邦人たちの場合は、まず聖霊が下り、それからバプテスマが続いています。

では、どちらが正しいのでしょうか？信じた後、洗礼が先か、それとも聖霊が先か…。私にもわかりません。ただ今日の箇所が、異邦人たちの最初の救いの時、つまり、聖霊が下った最初であったことを考えるなら、この時が「特別」であったと考えるのが自然ではないでしょうか？つまり、ペテロが最初から語っているように、悔い改めと主への信仰によってバプテスマを受けることが先で、その後、聖霊の賜物が与えられると考えるのが良いと思います。

いずれにしても、ここでミスしたくないことは、それがいつ、どのようにして？ということよりも、信じてる私たちは聖霊を受けているのか、聖霊の賜物としての神様を大きくする、賛美する心がうちに与えられているのか、ということです。いかがでしょうか？今日、あなたは聖霊を受けていますか？その聖霊の賜物として、あなたのうちには、主への賛美がありますか？御子イエスを知ることを通して、あなたのうちで父なる神様は大きくされていますか？

確かに主イエスは、生ける者と死んだ者とをさばかれる方です。そして、さばき主と聞いて、普通は、親しみよりも恐れを感じることでしょう。でも、主イエスは、私たち罪人の代わりに、神様のさばきを進んで受けて下さった方です。私のため、あなたのために十字架にかかって死んで下さったお方です。主は、その犠牲をもって私たちに対するさばきを赦しへ、滅びを救いへと変えて下さいました。そこまでして愛して下さい方が、ご自分に望みを置く者を、恵みをもって導いて下さらないはずがありません。主が信じるすべての者に聖霊を与えて下さる理由はそこにあります。

聖霊は、コルネリオたちのように信仰と従順をもって主の前にへりくだる者に賜物（ギフト）として与えられます。もちろん、与えるかどうかは、私たちではなく、主の側のチョイスです。でも、ご自分が率先してコルネリオとペテロに働きかけられることで、異邦人たちにも聖霊を注ぎ、その救いを確かなものとされた主は、ご自分の前にへりくだる者、みことばに聴き、祈りをもって従うすべての者に聖霊を与えて下さるのです。そして、聖霊によっていよいよご自身を現すことで、信じる私たちのうちに主を賛美する心、この世のすべてのものに遥かに増して、主をあがめる心を大きくして下さいます。主の前にへりくだらうではありませんか。